

# 小さなお子さんの遺体も多い。 むしろ少し落ち着いてからが心配だ

大津波の被災地で生存者を救出し、今も行方不明者を捜索している消防隊員たちは、連合の組合員だ。  
自治労・全国消防職員協議会の事務局次長で、宮城県栗原消防署に勤務する石川正紀さんと、同じく栗原消防署の鈴木達也さんに、救援活動の実態を話してもらった。



石川正紀  
(いしかわ・まさき)

自治労・  
全国消防職員協議会  
事務局次長  
宮城県・栗原消防署  
東分署



鈴木達也  
(すずき・たつや)

宮城県・栗原消防署  
南出張所

## 発見した遺体に 目印を付けながら進む

―3月11日の状況は？

石川 地震が発生した14時46分、栗原市では最大の「震度7」を記録し、まっすぐ立ってられないほどの激しい揺れだった。幸い火災は起きなかったが、119番通報は相次ぎ、5台ある救急車はすべて出動した。地震による落石や、体育館の天井が落ちた際にケガ人が発生、ガス漏れや灯油タンクの倒壊による漏油などが多かった。また、停電で在宅医療の酸素吸入器が止まったという、ホームヘルパーからの通報もあった。



写真/EPA=時事提供

そして、地震から約1時間後。東北太平洋側の広い範囲を巨大津波が襲い、町や村を次々と飲み込んだ。その後の

状況は消防無線に刻々と入ってきたが、情報は断片的で、被害の全体像はまったく把握できていなかった。

17時頃には、栗原市消防本部として「緊急消防援助隊」への対応が可能である旨を、大崎消防本部へ報告し、直ちに消火・救助・救急・後援隊の出動準備を進めた。私は、栗原に残ったが、署からは9名が第一次派遣として南三陸町に出動し、他の援助隊と合流するため隣接する登米市の消防本部には未明に到着した。拠点となった山間の民間施設で他の隊と合流し、4時20分頃、海側をめざした。だが、道路は瓦礫で塞がれて進めなため、一旦引き返して夜明けを待つとの連絡が入った。

朝7時40分、車両は使えず、志津川消防署までの3kmの距離を徒歩で向かった。そして、10時55分に第一次派遣隊からの衛星携帯電話で栗原市消防本部に連絡が入り、消防無線で南三陸町の被災状況が報告された。その時の無線発信内容を、今も鮮明に覚えている。「消防庁舎は壊滅状態で、署員1名の死亡を確認、4名が行方不明」という内容だった。その後の状況も入ってきたが、家や車などあらゆる物が漂流物として堆積し、その表面には油膜が付着している。そして、それらの瓦礫に混ざって、あちらこちらに多くの遺体が転がっている。だが、遺体を移動することは止められていたので、その場所に目印を付けながら進んだという。

それを聞き、各地で甚大な被害が起きていることを実感した。

鈴木 その後の状況は、私も仲間から聞いた。行方不明者の捜索は、ある程度まとまった人数で行動する。少数では、たとえ遺体を発見しても搬送することができないからだ。発見した後、「ここに遺体がある」という目印を付け、毛布があるときは、上から掛けながら移動していったという。

石川 消防隊も救急隊も、本来の業務は人命を救うことだ。阪神・淡路大震災や過去の大地震の時も、倒壊した家屋などから生き埋め状態の人を懸命に救出した。今回も1人でも多くの命を救おうと現地に向かったのだが、ある隊員は、「津波は1か0だった」と言っている。

## 「死因の9割が水死」という惨状

―1か0？

石川 生存が確認された方は、比較的、軽傷の場合が多かった。直後の病院は大変な状況だったが、短期間の入院で家や避難所に戻れた方も大勢いた。その一方で、宮城県警が「死因の9割が水死」と発表したように、発見された時には多くの方が亡くなっていた。救急隊としての人命救助活動は、ほとんどできなかったというのが現状だ。

さらには、津波による瓦礫の山が、捜

索活動の障壁になった。まだ重機も入れず、資機材が限られる中、人の力で瓦礫を取り除きながら行方不明者を探したという。

鈴木 私が南三陸町に入ったのは、震災から1週間後だった。町の北部で少し高台にある歌津中学校が避難所になっており、その体育器具倉庫が救急隊の待機場所だった。ケガによる通報は多くなかったが、持病が悪化した、葉が切れたなどの救急要請を受けて、気仙沼病院などに患者を搬送していた。緊急消防援助隊の集合場所である南三陸町ベイサイドアリーナは遺体安置場となっており、時折、すすり泣く声も聞こえ、何とも言えない重苦しい雰囲気だった。

現地で消防学校時代の同期たちと話す機会があった。1人は津波に流され、ドアに足を強く挟まれて骨折したが、何とか自力で泳ぎ、奇跡的に助かった。その方の上司と話す機会があったが、明るく気丈に振舞っているが、詳しく話を聞くと奥さんが亡くなったと言う。特に沿岸部で働く消防士たちは、救援者であると同時に被災者だ。そのような中で今も活動を続けている。

## 役場の職員たちも 極限状態にいる

―どのくらいの消防隊員が現地には？

石川 この間、全国の消防署から2万



写真/AFP=時事提供

8000人以上の隊員が、緊急消防援助隊として被災地に入った。行方不明者の捜索では、日を追うごとに、おびただしい数の遺体を発見し、遺体安置所へ搬送していった。中には、小さなお子さんも大勢亡くなっており、隊員たちの精神的なストレスも非常に大きいはずだ。これまでは悲しんでいる暇もなく、懸命に活

動している状態だが、むしろ少し落ち着いてからの方が心配だ。「自治労・全国消防職員協議会（全消協）」としても、消防職員のメンタルケアについて、これから情報交換をしながら、対策を検討していくことになると思う。

被災地では、もちろん消防だけでなく、自衛隊や警察、海上保安庁なども一緒に、行方不明者の捜索に当たっている。活動が長期化する中、どの隊員も非常に大きなストレスを抱えていると思う。さらには、医療関係者や自治体職員の皆さんも休みなく働いており、私たちから見ても心配だ。過労で倒れた自治体職員を救急搬送することもあるが、身体的な疲労に加え、遺体安置所での対応や埋葬、衣服の洗濯なども含め、亡くなった方に接する際の精神的ストレスはとてつもないと思う。報道されない厳しい現状が、今日も続いている…。

(6月13日インタビュー)